

第42回大会シンポジウム報告

② 学校側からの連携について：清水氏から次の提案があった。適切な福祉サービスを実現するためにも、福祉側から学校へのアプローチの必要性を考えている。例えば、現場実習や支援ツール作成教室等、学校が主催する事業に参加させてもらうことを通して、積極的な情報共有を実施していきたい。

自主シンポジウム 55

聾学校における通級による指導の
現状と課題について（その2）

企画者 井坂 行男（大阪教育大学）
 司会者 加藤 哲則（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）
 白井 一夫（新潟県立長岡聾学校）
 話題提供者 加藤 哲則（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）
 白井 一夫（新潟県立長岡聾学校）
 大石 視朗（神奈川県立平塚ろう学校）
 村松 弘子（愛知県立豊橋聾学校）
 指定討論者 藤本 裕人（国立特殊教育総合研究所）

1. 企画の要旨

2001年度より聾学校に通級指導担当教員が順次配置され、現在では約半数の聾学校で通級による指導が実施され成果を上げている。前回のシンポジウム（第40回大会）では、全国調査結果および担当教員による現状と課題に関する報告がなされた。今回のシンポジウムでは、聾学校通級指導教室の現状と課題に関する担当者の報告と聾学校の地域の聴覚障害教育センター化の動向に関する報告に基づき、聾学校の通級による指導実施上の成果と課題および今後の方向性について、さらに聾学校のセンター化の動向や特別支援教育体制への移行に関する検討も踏まえて討議した。

2. 話題提供の要旨

加藤は、通級による指導と聾学校のセンター化に関して、聾学校では早期から幼稚部の設置と幼稚部就学前の難聴乳幼児教育相談事業が開始されていること、聴覚障害児の小・中学校就学の子後指導、聴能サービスの充実、人工内耳手術の低年齢化による医療機関との連携、通級による指導の実施等により、聾学校の専門的な施設・設備や指導などが確立されたことを報告した。さらに特別支援教育コーディネーターとの関連

から、通級指導担当者の役割が関係機関との連携や地域のセンター的役割の観点からも重要であること、聴能・教育相談・通級指導担当等の専門的な知識・技能などを持ち合わせた教員の集合体でコーディネートするコーディネーター・グループを組織することを提案した。

大石視朗氏からは、通級による指導における在籍校・関係機関との連携について、神奈川県立平塚ろう学校での事例をもとに、聾学校通級指導教室の日常の連携、聾学校の学校公開・通級指導教室公開授業・懇談会、在籍校担当者を対象にした研修会の開催、在籍校での難聴児理解の授業の実施、大学との連携による親子学習会の開催、神奈川県難聴言語障害教育研究協議会との連携等の報告がなされた。連携の成果として、保護者・ことばの教室や難聴学級の担当者から通級指導教室への入級希望が直接行われるようになったこと、補聴相談・就学相談が増加したことが示された。また課題として、行政管轄の問題、小・中学校通級指導教室・難聴学級の担当者の専門性や意識・考え方の違い、連携や地域支援へ聾学校からの積極的な提案の重要性、役割分担の検討などが示された。

白井一夫氏からは、通級指導における学習支援について、新潟県立長岡聾学校通級指導教室の実践をもとに報告がなされた。聾学校の通級指導教室には従来まで支援する機関の少なかった難聴中学生への支援の期待があるとした上で、聾学校通級指導教室の指導内容が聴覚活用・発音・言語指導などの自立活動に偏る傾向があるとし、難聴中学生に必要な支援として学習支援の重要性を指摘された。学習支援の方向と方途について、コミュニケーション・認知・学習のプロセスを、言語による入力・情報処理・出力に分けて整理して、書き言葉の活用、言語面でのスキルアップ、トレーニングによる学習スキルの指導などが提案された。

村松弘子氏からは、通級による指導における現状と課題について、愛知県立豊橋聾学校での事例をもとに報告された。通級による指導を受けている児童の障害認識と学校生活での問題点への対応として、情報保障として社会福祉協議会による要約筆記派遣、在籍校担任教員・通級指導担当教員の相互参観、在籍校の校長等の理解、社会資源の利用として障害児・者地域支援事業による在籍校での研修会開催、対象児の聾学校体験交流の実施、通級指導担当教員の研修について言及され、対象児を取り巻く各関係機関との連携協力体制の確立には相互訪問等の顔の見える連携の重要性、聴覚障害児の集団の保障、聾学校からの広報活動による

地域における理解啓発の必要性が提案された。

3. 指定討論の要旨

指定討論者の藤本裕人氏は、まず特別支援教育体制に向けた現状報告と特殊教育諸学校のセンター的機能について言及された。さらに聾学校と聾学校通級指導教室の取り組みが、今後、盲学校・養護学校のモデルとして重要な役割を担うことが指摘され、聾学校ならびに聾学校通級指導教室の実践の充実が求められているとした。
(文責：加藤哲則)

自主シンポジウム 56

ろう教育と手話 3

—音韻認識を中心に—

企画者 小田 侯朗 (国立特殊教育総合研究所)
司会者 小田 侯朗 (国立特殊教育総合研究所)
話題提供者 大杉 豊 (全日本ろうあ連盟)
武居 渡 (金沢大学)
長男 浩人 (高知女子大学)
指定討論者 鳥越 隆士 (兵庫教育大学)

1. 企画の趣旨

ろう教育の歴史において読み書きの力の伸展は常に教育の大きな柱のひとつであった。日本語の読み書きに関してもさまざまなアプローチが積み重ねられてきたが、そのひとつとしてろう児が日本語の音韻意識を身につけていく方法については、これまで主として聴覚・口話法を中心に議論が進められてきた。しかし最近アメリカや北欧のバイリンガル教育への関心が高まる中で、あらためて多様な音韻意識習得へのアプローチが議論されるようになってきた。

本シンポジウムでは手話、指文字、キュードスピーチ、聴覚・口話など現在のろう教育で用いられているさまざまな言語媒介手段を通じて日本語や英語の音韻意識を育てる理論や実践を紹介することによって、ろう教育における音韻意識へのアプローチを整理することを目的とした。

2. 話題提供

(1) 話題提供 1: 武居 渡

武居氏は従来の聴覚・口話法とバイリンガルアプローチにおけるリテラシーへの取り組みを比較し、またこのシンポジウムのきっかけのひとつとなった Gal-

laudet 大学、Clarc Center 発行の ODYSSEY (2003 年秋号特集「書記言語への鍵」) を紹介した。その上で指文字の習得過程について日米の研究成果を紹介しつつ、日本語や英語の音韻意識を育てるために指文字が果たす役割の可能性について述べた。

(2) 話題提供 2: 大杉 豊

大杉氏は上記 ODESSEY に紹介された Sam Spalla の手話の分析的な表記法について紹介するとともに、これに基づく大杉氏自身の実践を解説した。ここから手話と日本語の書きことばの関連づけについて示唆を与えた。

(3) 話題提供 3: 長南浩人

長南氏は聴覚・口話法およびキュードスピーチ法を中心にろう児の音韻意識の発達に関するこれまでの日本および海外の研究を概観するとともに、聾児の音韻発達のつまずきのパターンと、それに対する指導法についてかなり詳細に紹介した。

3. 討 論

指定討論者の鳥越氏は三者の話題提供にふれつつ、あらためてろう児のリテラシー伸展に関わる音韻意識の位置づけについて整理をした。その後討論に入ったが十分な時間がなく、話題提供者の発表内容の確認と若干の意見交換でシンポジウムを終了した。